

2020/01/19

“シンガーソングペインター”畑中摩美 × “歌うたい兼消しゴム版画家”Ritomo presents
『おんなのつよさ、もしくはよわさ』を見た、1人のおんなの話。

「女ってめんどくせえよなあ」「女ってよくわかんない生き物」

こういう男子の声が居酒屋で聞こえてくるたび、「よしよし、何があったのか話してごらん」と
つい声を掛けたくなる、めんどくさい28歳の女・ラジオDJのizumiです。

そうなんですよ、女って強いのか弱いのか、熱いのか冷たいのかわからなくない？

女の私からしても、「謎」な部分多い。

私も自分が女であることをいやだなあと思うこと、これまで多々ありましたが、
大人になるにつれ、その謎な部分や、めんどくさいドロドロした所を楽しめるようになってきた
のです。それは、世の中には、自分と同じ、おんなのつよさとよわさを併せ持った人たちの歌が
あるから。

その歌のおかげで、女性であることを楽しめている気がするのだ。

この日は「おんな」であり、シンガーソングライターでもあり、ペインター・版画家としての才能
も持つ畑中摩美さんとRitomoさんの化学反応が楽しめたライブ。

ステージには、「おんなのつよさ、もしくはよわさ」というタイトルがズシッと重くも、
繊細な筆文字で書かれている。（Ritomoさんのお友達の書道家さんの文字なんだそう！）

このステージで歌うトップバッターはRitomoさん。

私が彼女を知ったのは「我が春」という曲からだった。

夜の世界に身を投じることを決意した女性の心情を歌ったこの曲は、K-mixでも沢山オンエアされ
ていて、聴くたびに同じ女性として、ほっとけない、人ごとではない感情にさせられる。

この日最初に歌われた、「化粧落とし」という曲でも同じ感情になった。

Ritomoという歌い手は、心の片隅にある、言葉にならないぐらいの女のちっちゃな思いを、ふ
わっと柔らかく、でも時に牙を見せるように鋭く歌って、心に刻み込んでくれる。

これで23歳なんだってよ。32歳の間違いじゃないの？（おい）

でも時折、ありのままの素顔で畑中摩美さんとの出会いや他愛もない話をする表情を見ると、
こんなに可愛らしい顔をしてしゃべるんだ、とホッとしたりもする。

なんだか、女の子に振り回される男の子の気持ちがわかるような気がする、、、なんて。笑

1番印象に残ったのは、彼女曰く「いかがわしい曲」、「n番目の女(n>1)」。

グルーヴィーな渋いギターの音色と、都合の良い奴になってしまう女の話。

歌詞だけ聴くと重い女の話なのかもしれないけど、

ギターの音と合わさると、不思議とその女の姿がちょっぴりコミカルにも映るし、

今の時代に合うような、スタイリッシュさもある。こういう曲を色んな角度から楽しめるよう
に、嫌味なく歌えるのもRitomoという歌い手のひとつの才能だと思うなあ。

艶やかでやわらかい声、ギターの温かみ、ひとつひとつの言葉を噛み締めて歌う表情。

「弾き語り」ってシンプルだけど、無限の可能性があるって思い知らせてくれると同時に、

「メジャーデビューがしたい」ときらきらした目で話す彼女は
どんな歌手になっていくんだろう、と未来も楽しみにさせてくれるステージだった。

Ritomoさんが働くライブハウスで、

「畑中摩美っていう人、今日出るんだけど、お客さん沢山来るから、忙しくなるよ！」と
以前上司に言われたことがあったらしい。

それほど、デビューから沢山の人の心に残る歌を歌ってきた、畑中摩美さん。

今日もその「歌の力」は凄かった。

のほほん、としたMCからまるでスイッチが変わったかのように解き放たれた歌声にビビッと来
る。じわじわと、でも確実に空間を「畑中摩美」という世界に色付けていく天才だと思った。

この日のライブテーマでもある、「おんなのつよさ、もしくはよわさ」に合わせて

色んな「女の顔」を歌で表現する。

CMソングでもおなじみ「あなたと私のいつものはなし」のように、

毎日のなかにある大切な気持ちを近い距離から描く曲もあれば、

時には「絶景」のように大きな世界から主人公にフォーカスを当てていく曲もあり、様々な世界
観で私たちの日常を照らして温めてくれる。

そう、まみのす（彼女の愛称）の曲を聴いていると、

生きる上で「面倒臭いなあ、、」と思う小さなことも、明日からコツコツと生きていくのが楽し
みになってくるのだ。

ああ、まみのすよ、ありがとう。

特に「珈琲恋歌」という曲が強烈なインパクトを放っていた。

「ドリップしてほしいの」と湿った女心を珈琲に例えて歌い、かき鳴らされる熱いギター。

「恋する女はきれいさ〜」ってかつて郷ひろみさんが歌っていたけど、本当その通りだね。

この曲を歌う、まみのすの美しさよ。

思い通りにならない恋だって、苦しい恋だって、女は美しさに変えて生きているのです。

そんな恋も悪くないかもって思えるほど美しくカッコいいこの「珈琲恋歌」。圧巻でした。

そしてライブの締めくくりは2人でのステージ。

お互いの曲にインスパイアされたイメージをイラストにし、なんと巾着袋にするという、「アー
ティスト」としての顔を持つ2人ならではのプレミアムなアイテムも登場。

畑中さんはRitomoさんの「トマトソーススパゲティ」、Ritomoさんは畑中さんの「秘密の花園」
にインスパイアされたイラストを披露した後、この曲たちをセッション。

畑中さんは「自分だったらこういう曲は書かない。すげーなって。」と改めてRitomoさんの感性
を称賛。2人の違う個性を持つ「おんな」が織りなすハーモニーが斬新で、心に響く。

このセッションを聴いて、似てないようで、似てるところが根底にいくつもあるから、こうやって
音楽でシンパシーを感じ合って、ひとつの化学反応が起きるんだなあ、と実感。

お客さん達も、このコラボの歌声にうっとりしているようだった。（もちろん私も）

良いライブを見たあとは、会場から出て踏み出す一步が軽やかだ。

この日もそうだった。寒い風が吹く外に出て一步を踏み出してみると、明日からどう生きていこ
うかと、頭のなかで模索をし始める。

私はこの瞬間が何より1番好きだ。彼女たちの歌に背中を押されてると強く実感するから。

きっと明日からも、加減が出来ず頑張り過ぎて突っ走って、時々ウジウジして落ち込んで、落ちるとこまで落ちて、また立ち上がって生きていくんだろう。

でもやっぱり女であるっていいな。強くて、弱くて。

今日聴いた2人の歌は自分の心の中で永遠に冷凍保存してあるから、女でいることに疲れたらそっ
と取り出して解凍してまた思い出そうっと。

畑中摩美と、Ritomoという同志のような女性がいれば、きっとこれからも明るく生きていける。

2020.01.19 K-mix パーソナリティ izumi